# 女優「川上貞奴」女史との出逢い

## 私と二葉館

このコーナーでは、二葉館への思いを綴っていただきます。

第一回は、「貞奴甚句」の作詞・作曲者で「甚　富華と正調名古屋甚句を拡める会」の代表である甚富華こと華房真子さんです。

甚 富華（華房真子）

私と「川上貞奴」女史との出逢いは突然やってまいりました。文化のみち二葉館が開館されてから四ヶ月後の平成十七年六月の金曜日の午後かと記憶しております。案内していただいた館長さんのおはなしと、ステンドグラスの間、衣装、写真等拝見し、世界の女優「貞奴」女史が、大変身近になりました。以前より、彼女と桃介さんが過ごした事のある木曽の三留野は知っておりましたので春夏秋冬の美しいその風景が瞬時に脳裡に浮かびました。その日より、ふたばの日の二月八日には、当社中で「正調名古屋甚句」を披露させて頂き、無料講習会におきましては、多くの方に指導、交流させていただいております。

貞照寺での、貞奴甚句奉納の様子

本年二月八日、四周年の「ふたばの日」には『貞奴甚句』も発表出来まして本当にありがたい事と思っております。彼女を知るにつれ、関心が増し、お孫さんの「川上初」様にお目にかかりにまいりました。秘蔵の写真、お話しであっというまに二時間程過ぎまして、春のおぼろの昼下がりの二日が人生の至福の日となり、未熟な私が和楽を通して「貞奴」女史の偉大さを知り、彼女への思いが募っていきました。一月三日、貞奴女史が建立された「貞照寺」へ出かけ、娘・小真と夫と三人で墓前へ唄の報告を致し、再び、"奉納演奏に参ります"とお約束をし、四月二十六日に実現しました。本堂参会者満席の内、「貞奴甚句」の演奏をさせていただきました。誠に満ち足りた一日でした。

文化は人から人へと伝えられ、人類が滅亡せぬ限り、それぞれの形で残ります。文化のみち二葉館（旧川上貞奴邸）を支えられます関係者様は、伝え守るお役目を発揮されておられます。本当にすばらしく感じます。私も、大正生まれのモガでした母に聞かされた「貞奴」女史を愛し、「貞奴甚句」、「正調名古屋甚句」両曲を拡め伝えます事を使命とし二葉館とのご縁を深めてまいりたいと存じます。

# 文化のみち逍遥 その一

## 「幸福は我心にあり」

文化のみち憧木館館長
兼松はるみ

文化のみち憧木館（旧井元邸）の洋館2階サンルームに、一人の男性がスーツに帽子、半ブーツ着用でなぜかダチョウに乗っている、という写真が展示してあります。その人こそ、この家の主であった井元為三郎です。

昭和9年、ロサンゼルスにて

為三郎は明治30（1897）年、陶磁器加工問屋「井元商店」を創業。同41年の名古屋港開港とともに輸出拡大し、サンフランシスコを皮切りに、シンガポールやニューヨークなどに支店を次々とだしてゆきました。そうして蓄えられた富をもとに、大正末から昭和初期にかけて、約600坪の敷地に和館、洋館、茶室、2棟の蔵を次々と建てていったのです。

その井元邸が憧木館と名前を変え一般に公開されるようになったのは、平成8年。数年間使われていなかった屋敷を5組の店子が借り上げ、以来コンサートや演劇、ワークショップなど、様々に活用されてきました。

とはいえ、当時はその存続が危ぶまれていた憧木館が、名古屋市の手によりこのたびリニューアルされたのは、感無量としか言いようがありません。

後生まで残ることになったのは、ダチョウに乗ってしまうというお茶目な？為三郎の終生の標語は「幸福は我心にあり」であったとか。大恐慌、第二次大戦、戦後復興期、現在も進行中の世界的不況。移りゆく世相を見つめながら八十数年の歳月を積み重ねてきた屋敷で、その言葉の意味するところをじっくりと考えてみてはいかがでしょう。

**DATA**

文化のみち憧木館

■開館時間　午前10時～午後5時
■月曜休館
（祝日の場合はその直後の平日）
（貸室は午後9時まで使用可）
■入館料　大人200円（各種減免あり）
定期観覧券（1年券）大人800円
■名古屋市東区憧木町2-18
（文化のみち二葉館より西へ徒歩3分）
TEL 052-939-2850
http://www.shumokukan.city.nagoya.jp/

▲ 8月に和館で行われた企画展の様子。

▲ 洋館1階の「珈琲館いもとホール」では、庭をながめながらお茶を飲むこともできます。

# 『二葉館の読書会』

## 郷土文学の会

市川 斐子

作家・城山三郎の遺したものの大きさは計りしれません。小説を読み、語り合うことで、その神髄に触れたいとはじめた読書会です。

『二葉館の読書会』がスタートしたのは、平成二十年六月十四日であった。あれから二年以上が経過した。城山先生が三十年余続けられた「くれとす」に及ぶレベルではないものの、とにかく二葉館から文学を語り合う熱い情熱を発信していきたいという思いに駆られ出発した。第一回は参加者が十名であったが、十四回では十七名ほどの会員になった。

これまでに読みあった作品名は以下の通りである。（毎月一冊読んでいる。）

第一回『そうか、君はもう居ないのか』
第二回『総会屋錦城』
第三回『創意に生きる　中京財界史』
第四回『冬の派閥』
※尾張藩主徳川慶勝
第五回『毎日が日曜日』
第六回『辛酸―田中正造と足尾鉱毒事件』
第七回『雄気堂々』※渋澤栄一
第八回『鼠―鈴木商店焼打ち事件』
第九回『部長の大晩年』
※俳人永田耕衣
第十回『官僚たちの夏』
第十一回『本当に生きた日』
第十二回『素にして野だが卑ではない―石田禮助の世界』
第十三回『もう、君には頼まない―石坂泰三の世界』
第十四回『わしの目は十年先が見える―大原孫三郎の世界』

在りし日の城山三郎氏

毎回、レポーターを一人決め、重厚な提案がなされている。次回は、浜口雄幸と井上準之介が主人公の『男子の本懐』である。

毎月読む城山作品に登場する人物が、私利私欲のない生き方を徹底して貫き通していく生きざまに圧倒されつつも、我が人生の生き方に力をいただいている。また、城山先生が一つの作品を書き上げられるために、文献収集は言うに及ばず、関係人物に直接会っての取材活動の凄さに驚かされる。（『鼠』では延べ三百人から取材されている。）創作される城山先生の誠実で純粋で、その上激しい気概が読む者に伝わってきて、今更ながら城山先生の偉大さに感嘆している。本当は、先生のご存命中にこの読書会を立ち上げれば良かったのにと思ったりもしている。先生が私たちの話し合いをお聞きになってどうおっしゃるのかと。

皆様どうぞ読書会にお越しください。

読書会では活発な意見がかわされる

## 書庫様から

### 「本とつきあう」

文学ボランティア　村手　幸子

今では文化財的町並みとなっている東京神田の古書店街、そこから程遠からぬ所に生まれ育った私は、今も古い本に接するのが好きだ。二葉館の文学ボランティアを始めたのも、本とつきあう魅力があってのこと。いわゆる古書ではないが、名古屋を舞台とした文人たちの蔵書に触れられるのも、ボランティア冥利といえるだろう。

蔵書の主、例えば城山三郎さんの人生暦は、私の過ごしてきた時代とほぼ一致する。著作はもとより、身辺の多彩な参考資料に至るまで、ごく自然に共感できるのは、時代を体験した者同志の強みであろうか。

春日井濵・建の歌人一家の蔵書からは、中部歌壇ばかりでない、全国歌壇に及ぶ華々しい活躍ぶりを垣間見ることが出来る。また時には、濵先生の書棚にあったのだろうか、『群書類従』という江戸時代の人に依る古い叢書にめぐり会うことが出来、思わずページをめくってしまう。

昨秋二葉館で行われた「白壁の文士たち」展では、大正時代、白壁界隈がモダニズム文化の担い手たちが集まる場所であったことを教えられた。白樺派の文芸運動の波は、名古屋にも寄せていたのだ。私の知らない名古屋との出会いであった。

ボランティアの朝、二葉館への道すがら「今日は何に出会えるかな？」と多少の期待を抱く。一方では、仕事という適度の緊張感がシルバー世代の私の一日を支えている。